

平成 27 年度第 3 回京都スポーツの絆が生きるまち推進会議摘録

日時：平成 28 年 2 月 22 日（月）午前 10 時 30 分～正午

会場：京都市役所本庁舎 1 階 E 会議室

出席：

＜委員＞飯田委員，石野委員，高屋委員，檀野委員，藤井委員，松永委員，
三浦委員，森井委員，山下委員，福林委員（局長）

＜京都市＞

（文化市民局市民スポーツ振興室）

松田市民スポーツ振興室長，北川スポーツ企画課長，横山スポーツ振興課
長，安田施設担当課長　ほか

（オブザーバー）

森田体育健康教育室体育課長，中村長寿福祉課担当課長，東障害保健福祉
推進室社会参加推進課長，杉本障害保健福祉推進室社会参加推進係長

（傍聴）

京都サンガ（プロサッカー）京都ハンナリーズ（プロバスケットボール）
京都フローラ（女子プロ野球）ほか

1 開会（事務局：松田室長）

2 委員長挨拶（山下委員長）

皆様にはこの間多方面にわたりご尽力いただき御礼を申し上げます。お陰様で中間見直しがまとまってきた。本日最後の審議をお願いしたい。

3 議事

（1）京都市市民スポーツ振興計画改定版の策定について

ア 市民意見募集の経過報告

○資料説明；資料 2 資料 3 （事務局：北川課長）

・山下委員長

事務局からの説明に関し質問・意見があればどうぞ。

それでは，改定版に反映する 7 項目について確認して参りたい。
5 ページの「プロ野球の誘致」について意見はないか。（各委員賛
同）続いて 13 ページの「平成 31（2019）年から 3 年連続

で大規模国際スポーツ大会…が国内開催されることにより高まる市民のスポーツに対する関心や意欲を一過性のものに終わらせず…」についても問題はないか。(各委員賛同) 続いて14ページの「ラグビーワールドカップ」を追記することに関して意見はないか。(各委員賛同) 続いて「アダプテッドスポーツ」という言葉をずっと使ってきたが、分かりにくいという市民意見があったことから、事務局案はアダプテッドスポーツの前に「だれもが参加できる」という文言をいれている。これに関しては私の方から意見を述べさせていただきたい。事務局案では「だれもが」が強調されており、従来から課題の障害者スポーツがこの中に埋没してしまう可能性がある。そこで「障害者を中心にした」にすることを提案したい。「障害のある人はもちろんのこと、だれもが参加できる」という説明があるので分かりやすい気がするがいかか。

・松永委員

私も委員長の意見に賛成である。一般的にもアダプテッドスポーツを代表するのは障害者スポーツだと思う。それから別の観点から申し上げると、事務局案の「だれもが」の中には、障害者以外の幼児から高齢者までが入ってしまっているのも障害者をもう少し強調すべきである。合わせて、16ページの「子育て期のスポーツ参加機会」と「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」について、そこには幼児期のライフステージも含まれていると思うが、「幼児期」という文言が「こどもの多様な体験機会の創出」の中にはどこにもない。「子ども」というとおそらく小学生以上のイメージが強い。15ページのアダプテッドスポーツの普及・充実では、障害者を強調していただく、「幼児」については16ページの上記2項目において、「幼児期を含む子どもたち」あるいは幼児期が含まれていることが分かるような表記にさせていただく。そうすれば、小学生以上という印象が薄まると思うので検討いただきたい。

・事務局（北川課長）

16ページには「親子や多世代で楽しめるスポーツ機会の拡充」に「幼児期からの子どもの体力向上や…」と書かせていただいているが、「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」にも幼児期を表記するということか。

・松永委員

「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」にも幼児期を強調されたいと思う。

・山下委員長

「親子や多世代で楽しめるスポーツ機会の拡充」では多世代を重視しているが、「子どもの多様な…」には幼児期というような世代間ではなくて、トップスポーツをやる、健康や遊びでやるなど

スポーツに対するいろいろな感性を豊かに育てようという意味を含んでいるように思うので、あまり幼児という世代を強調するよりも事務局案の方がいいような気がするが。

・松永委員 「親子や多世代で楽しめるスポーツ機会の拡充」で親と一括りにすると幼児期が埋没しているような気がする。国の施策等でも「子どものスポーツ機会の充実」に幼児期という言葉が入っているので、「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」に明記する方が幼児期は強調される。

・山下委員長 では「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」に幼児期を明記するがそれでいいか。

・事務局（北川課長）「子どもの多様なスポーツ体験機会の創出」の説明のところに「幼児期から子どもたちが…」とさせていただく。

・山下委員長 アダプテッドスポーツの修正に関しては「だれもが参加できる」というよりも「障害者を中心とした」という言葉を補ってアダプテッドスポーツの社会的意味を少し強調させていただく。スポーツができなくなるという障害も取り除かなければいけないと思うが、藤井委員いかがか。

・藤井委員 その下に「障害の有無に関わらずスポーツを楽しむ機会の拡充」があるので、上の項目は「だれもが参加できる」でも良いと思っていた。障害の有無ではなく高齢者もだんだん目が見えなくなったり耳が聞こえなくなったり、体が動けなくなったりするので、高齢者も含めるのであれば「だれもが参加できる」のままでいいのではという気がする。

・山下委員長 そうすると全体が「だれもが参加できる」を協調した文面になってしまう。施策としてどこかでスポーツができなくなるという障害を取り除くという方針も明記したいということである。「だれもが」ばかりが協調されると障害者スポーツが隠れてしまう。だれもが参加できるということであれば、アダプテッドスポーツという言葉を使わなくてもいいのではないか。アダプテッドスポーツが障害者スポーツだという意味ではなく、障害者を中心としたという言葉で補い分かりやすくしたい。他の委員の方はどうか。（各委員賛同）それではそういう風にさせていただく。

続いて16ページの「子育て期のスポーツ参加機会」に関しては、その下の項目に「幼児期からの」を補うという修正をさせていただく。

続いて22ページ「スポーツリエゾン京都」の内容だが、「文化芸術・観光・食育などスポーツ以外」を補いたいということであ

る。これはその方がいいと思うがよろしいか。

- ・ 松永委員 「食育」と無形文化遺産に登録されたような和食のような文化的な食では意味合いが違ってくると思うが、「食育」となると、栄養素的な要素が強調される印象がある。この場合、広い意味で「食」だけではだめなのか。どなたか詳しい方がいればアドバイスをいただきたい。スポーツコミッションのようなイメージでいくと「食」の方がしっくりくる。
- ・ 事務局（森田課長） 私自身直接の担当ではないが、「食育」の関係団体というのはあまりイメージがない。いずれかの団体が食文化の普及をする中に食育も入ってくるのではないか。松永委員がおっしゃるように若干狭いイメージがある。
- ・ 事務局（松田室長） 当初スポーツと健康という意味合いもあり、食育という考え方だった。ただし、おっしゃるようにスポーツリエゾン京都の趣旨からも幅広く食文化も含めているので、皆様がよろしければ「食」ということで対応させていただきたい。
- ・ 山下委員長 食事そのものは文化の方に入っている。健康・食育団体のようにしてはいかがか。そうするとひとつのジャンルができるような気がする。今回健康が抜けているようなので、食育と健康をくっつけて関連団体をイメージしてはどうか。
- ・ 事務局（北川課長） 健康はどの分野にも関わってくるということで健康を入れていなかったが、室長からあったように食育では限定しているところもあるので、「食」ということでいいと思う。
- ・ 事務局（松田室長） 健康は健康長寿、健康寿命の延伸ということも含めて基本的なコンセプトに入るので、幅広い食という方がいいと考えている。
- ・ 山下委員長 「食関連団体」という言葉はあるのか。飲食ではどうか。
- ・ 松永委員 飲食ではイメージが異なる。食文化の関連団体というのでは難しいか。
- ・ 藤井委員 おそらく「食育」が加わったのは市民意見の中の「健康・障害福祉・教育・食育・観光などの」を反映されたのだと思う。その場合、教育の後に食育が付いているので、関連で成り立っている。計画では観光の後に食育が付いているので違和感がある。食文化というと、文化にはもっといろいろあるのに食だけに限られてしまうので、もっと良い言葉がないかと思う。
- ・ 松永委員 スポーツ＋αでは、食はキーワードになっている。食、食文化というのがここに入ってきてもおかしくはない。市民意見として食育を反映するのであれば、観光をベースにした経済活性化のような視点の食と食育の両方が必要かもしれない。それをどういう

名称にするのか。切り離してどこかに入れるか。

- ・ 山下委員長 「食関連」でもいいが、「食育」でも分からなくはない。
- ・ 松永委員 「食育」は必要ということで22ページの文章中に残しても、23ページの図に入ると違和感がある。和食などの食は別の角度から必要だと思う。
- ・ 山下委員長 22ページは「食育」を生かして23ページは「食関連団体」にするか。
- ・ 事務局（松田室長） あるいは22ページの文章の方を「食」にし、23ページの図では「食（食育）」という表現ではどうか。
- ・ 松永委員 「食関連団体」に違和感がなければ「食（食育）」でも構わない。
- ・ 山下委員長 「食育」は広い意味での「教育関連団体」に入る。
- ・ 三浦委員 「食育関連団体」はどういう団体か分かりづらい。
- ・ 事務局（松田室長） 栄養の関係団体であったり、PTA・保護者の関係団体であったり、また食料関係のところでも「食育」というテーマでいろいろな活動をされている。健康とつなげる部分の団体は結構ある。そういった意味合いが「食育関連団体」。企業でも「食育」をテーマに任意団体をつくったりもしている。今ご指摘いただいたように、「食文化」も広く捉えれば「食育」とは異なる部分もあるので、「食」という表現がふさわしいと思う。
- ・ 山下委員長 カタカナにして「フード関連団体」ではだめか。
- ・ 福林委員 「食育」は市民からの意見だが、その方は「食育」という啓発も含めてやっている団体としっかりと連携していただきたいという趣旨なので「食育」は生かさないといけないと思う。一方、松永委員が発言されたように、「食」をどうするか。「食育」以外のところをどう生かすのかという議論だと思う。そのことをこの文章の中にどのように表現するかということだと思う。「食文化」とすると文化芸術との関連などその辺りの表現をどうするかは悩ましい。そこをポイントとして考えなければいけないと思う。
- ・ 事務局（森田課長） 「食育」は割と新しい言葉。PTAや企業などには積極的に食を通じた教育を進めようという団体がある。しかし「食育」だけに限定した団体というのはあまり普及していない。例えば大阪ガスが食育を普及するパートを持っているなどの事例はある。教育のひとつの分野だが、これに何か加えないと非常に狭いイメージしか想起されない。文化芸術と食文化は分野としてはそれほど重複しないイメージになると思うので、食育に食文化をつなげるのがひとつあると思う。

- ・ 山下委員長 22 ページの文章の方は事務局の原案通り「文化芸術・観光・食育など」とし、23 ページの「食育関連団体」は「食関連団体」しくは「食・料理関連団体」など表現が一番いいものを選ぶようにする。これに関しては事務局と相談の上、図の「食育関連団体」の表現を変えるということによろしいか。

イ. 主要施策に対する具体的な取組及びスポーツウェブ京都につて

- ・ 山下委員長 それでは続いて「主要施策に対する具体的な取組及びスポーツウェブ京都」について事務局から説明をお願いしたい。

○資料説明；資料2（事務局：北川課長）

- ・ 山下委員長 ただいまの事務局の説明の通り、主要施策の新規項目について具体的な取組の提案はあるか。また「スポーツウェブ京都」についても来年度サイトを立ち上げる可能性が高いということなので、サイトの中身についてこのようなスポーツ情報があれば良いというようなものがあれば、提案いただきたい。それでは14 ページからの新規項目にお目通し願いたい。これらの新規項目については問題ないということでもいいか。では続いて23 ページの「スポーツウェブ京都」のあらましが記載されている。だいたいそういう内容を掲載しようということである。これは主に利用者側の便宜を図るということだが、できればこのような会議や「スポーツリエゾン京都」にアクセスできるようなものだったらいいかもしれない。常に市民の意見を聴く場をつくるということである。
- ・ 松永委員 今委員長が言われた「スポーツリエゾン京都」を「スポーツウェブ京都」のコンテンツとして入れていただきたいと思う。後ほど報告させていただくが、「スポーツリエゾン京都」は何の団体なのか、この名称は何なのかということを地道に積み重ねていかないと、全く認識されないままになってしまうので、せっかく「スポーツウェブ京都」が立ち上がるのを機にコンテンツの中に入れていただき、アクセスできる準備をしていただきたいと思う。
- ・ 山下委員長 それではそのように取り計らうようにする。
- ・ 松永委員 「第4章 主要施策」のところで大規模なイベントが3年連続であるが、例えば16 ページの「ワールドマスターズゲームズ等の大規模国際スポーツ大会開催と連動した生涯スポーツの振興」の「文化プログラムと連携したスポーツイベントの実施」,「国際的・全国的規模のスポーツイベントの誘致促進」に「レガシー」

という言葉が文章中に入れて、ただスポーツイベントをやるだけでなく、そこで何を残すのかというところを強調する。“これやります、あれやります”という感じになっているが、何を市民に残すのかという取組をしているということを書かれた方がいい。

- ・事務局（北川課長） 確かに今はワールドマスタースゲームズやオリンピック・パラリンピックもそうだが、「レガシー」が強調されているので文章の中に入れたい。

14 ページ主要施策の冒頭の文章に「とりわけ、ラグビーワールドカップ、…、これまで以上に市民のスポーツに関する関心や意欲を高め、スポーツに親しむきっかけになることから、各大会の盛り上がりを実に市民スポーツの振興に結び付けるための取組を重点的に進めます。」とレガシーの意味合いとしては書いているが、「レガシー」という言葉も入れさせていただきたい。

- ・山下委員長 これも実際に入れると難しいと思うが検討するか。
- ・事務局（北川課長） 「レガシー」という言葉を入れることを検討させていただく。

（２）スポーツリエゾン京都ワーキンググループからの報告

- ・山下委員長 では次に「スポーツリエゾン京都モデル事業の結果報告」について、ワーキンググループからの説明をお願いしたい。

○資料説明；資料6（松永委員）

- ・松永委員 スポーツリエゾン京都を実際に運営していくにあたって、どこの団体、だれが中心になるのかという課題があるが、体育振興会を含めて継続的に議論をしていかないと難しいのではないかと考えている。右京区がプロスポーツ3団体の本拠地だが、今回、ワーキンググループに右京区の体育振興会の高屋委員に入っていたことによって、いろいろ情報もいただいた。当面プロスポーツ団体が活動する右京区・西京区の組織の方から御意見等をいただき、大学関係も含めてその辺りから広めていくのが現実的だと思う。ワーキンググループとしては大変だが、事業を実施することによってスポーツ以外の関係団体を巻き込み、地道に京都市のスポーツ推進を図ることができるのではないかと認識はできた。今後、組織体制づくりを含め、ワーキングという形で続けていくといいのではないかと考えている。今回はワーキンググループ3名と事務局で進めたがもう少し裾野を広げた形で、今回の課題を生かし、ゴミの分

別・啓発事業をプロ3団体と相談させていただきモデル事業として取り組みたい。あれもこれもと広げると大変なのでひとつの事業を継続していくことでこういう団体があるということを認識していただくことがもう少し必要だと感じている。高屋委員，補足があればお願いしたい。

・高屋委員

いろいろな組織に声を掛けてはいる。青年会組織のようなところも協力してくれそうな感触はあった。今回ゴミ減量推進会議関係の方にも協力いただいたが、右京区にはゴミ減量推進会議とは別の組織もあり，その委員長とも話したが協力に前向きであった。単にゴミ集めをしているというのではなく，きちんと説明させていただき，我々の団体について理解いただくことが重要だと思う。

・山下委員長

ただ今の松永委員，高屋委員の報告について質問等があればどうぞ。モデル事業としては充実した試みが行われたようで，大変感謝している。組織としての形をどう整えていくのかが課題として残ったが意見はないか。

・松永委員

山下委員長のおっしゃるとおり，何をするにも人が必要である。前回のモデル事業では，スポーツに興味のない人を「環境」というキーワードでプロスポーツと結び，「行ったら楽しかった」と興味を持ってもらうということを行った。

一方で，京都のためならどんなキーワードでもやるという人たちもいる。例えば，京都マラソンの個人ボランティアに登録された方の中にそういった人たちがいることが分かっている。そのため，来年度は「京都マラソン2017」に向け，ボランティア募集や研修の段階で京都マラソン以外の活動に参加を働き掛けるような仕組みづくりを京都マラソン実行委員会と一緒に検討していきたい。そして，その事業を運営していく団体の可能性の一つとして，京都市内の大学のボランティアセンターが挙げられるのではないかとと思う。力を入れている大学は専任職員を置いて機動的にやっている。今後，特に専任職員を置いてかなり活発に活動している大学とはスポーツリエゾン京都ワーキンググループのメンバーで話をさせていただき，スポーツリエゾン京都の可能性について模索することができるのではないかとと思う。その中で，リエゾンの事務局をやってくれる大学があればいちばんありがたいが，委員長がおっしゃるように，単にイベントをやるだけではなく，スポーツリエゾン京都の核になる組織づくりについても，今回のワーキンググループの活動を通して見えてきたことを補足させていただく。

また，プロスポーツ団体は「みるスポーツ」になるが，そこに「支

えるスポーツ」の人たちもセットになってくるので、しいては「するスポーツ」につながるというところから、当面はプロスポーツ3団体との協力を仰いでいきたい。

・山下委員長

これまでの経験から、今回のモデル事業に関してもそうだが、事業を実施していくことによっていろいろなことが積み重なり、できそうな気になるが、事業のみで立ち消えになってしまう恐れもある。そうすると、重点戦略の目玉の一つであるスポーツリエゾン成形として残すことは非常に難しいのではないか。

2つの具体的な方向性があるのでご検討いただきたい。ひとつは、推進会議から分離させて実験的に試みてもらったが、分離して実際に動けるのは、松永委員がおっしゃるように、大学間の協力だと思う。完全にこの推進会議から分離して大学間共同をコアにして活動する。当面は、例えば松永委員を幹事にして組織の実態を残す。それが実践的なスタイルになると思う。もうひとつは、今回で我々の任期が切れるので、この推進会議＝リエゾンということでメンバーをリエゾンの活動支援のために、推進会議を再編成していただく。そうすると組織として残るし、やらなければならない任務があるので消えることはない。どなたかに押しつけるとその人のボランティア精神だけで終わってしまう可能性がある。この推進会議を再編成していくということもひとつだと思う。この2つの案のどちらかを決めていただけると非常にありがたい。

次の推進会議の委員を選ぶ時にリエゾンの活動をしていただける人をメンバーに加えていくようなことをすれば、単にワーキンググループで終わらないひとつの任務を持ったリエゾンが出来上がるのではないかと思う。この先5年間、進捗状況をチェックするだけではもったいない気もする。事業実施についてはある程度可能性が見えてきた。常に斡旋するところを明確にしてどんどん膨らませていこうということだが、スポーツリエゾン京都の組織の立ち上げ方に関して具体的な提案はないか。松永委員中心のワーキンググループの活動は非常にありがたいし、大変だったと思うが、このままワーキンググループだけを継続していくだけでいいのか。ワーキンググループだけでズルズルいくのであれば、分離しないという案もあるのではないかとも思う。松永委員、高屋委員に残っていただき、リエゾンの方向に強化していただくという形でこの推進会議を作り直していただく方が手っ取り早いと思う。

・福林委員

委員と行政の両方の立場があるが、委員長のお話は非常に大事なことだと我々は思っている。正直申し上げますと前半5年間に、スポ

ーツリエゾン京都の理念をどれだけ普及できたか、あるいは具体的に何ができたかという点、松永委員にお世話になり、高屋委員と一緒にいただき進めさせていただいたことがやっとできたことである。事務局はスポーツ振興の業務に手が取られ先を見越した戦略的なことがなかなかできなかったというところを非常に反省している。その上で事務局を代弁することにもなるが、委員長がおっしゃったことと、松永委員がおっしゃったことは非常に悩ましいところがある。ワーキンググループには見えてきたところはあるが、広がりからいうともう少しいろいろな課題も含めてやっていかなければいけないのではないか。そういう意味ではボランティアとして参加いただく学生や地域の方たちなどと一緒に実績をつくるのが非常に大事だと思っている。一方で、そのことをずっとやっても具体的に核となって進めるところがどのような形で見えてくるのか。そこが非常に悩ましい。今委員長がおっしゃったようにこの推進会議そのものをリエゾンとすることもひとつの方法だとは思いますが、我々の立場からするとスポーツ振興計画に基づいたスポーツ振興をどうしていくのか。市民、委員の意見も踏まえて、大事な要素を持っているので、この会議自体をスポーツリエゾン京都の核とするのではなく、次回の委員を選出するにあたって、スポーツリエゾン京都をしっかりとこの中で議論して、中心的に進めていくという認識を持った上で委員に入らせていただくということも含め、あり方はここで結論を出すのは難しく、お時間をいただき検討させていただければと思う。

・ 山下委員長

スポーツリエゾン京都を推進会議から分離独立して、大学中心に活動するにしても金がつかない。この会議であれば多少予算がつくので、そのように考えた。

・ 松永委員

協力いただける大学は確実にある。大学コンソーシアムとの関係もあるが、大学が核になるのは難しい。

・ 福林委員

大学に協力していただくとしても、理念の実践やスポーツ振興にどのように関わっているのか、逆にスポーツから生活にどのように広がっていくのか。そこをしっかりと見てやっていくのは行政である。そういう意味では我々が中心にやらなければいけない。そうすると極端に言えば、スポーツ振興室がスポーツリエゾン京都の事務局として進める時にどのような関わり方にするのかなど見えないところがある。行政主導で進めるべきものではないと思う。いろいろな意見等をいただいてそれを我々がスポーツ施策の中で生かしていくことが本来の姿だと思う。そういうことから行政として事務局を

つくってもなかなか進まない。そこが悩ましいところでもある。組織の方向性をこの場でも結果動かなければ意味がないので、そこを非常に危惧している。

・山下委員長

この発想は、京都市では全国的に普及している「総合型地域スポーツクラブ」は無理だということで、そうしたら京都市全体でスポーツ実践共同体をつくろうということである。他の地域でいろいろな総合型地域スポーツクラブがつくられ、いろいろなスポーツの実践ができています。そのようなことを傍目でみて羨ましいなと思った。そういうものをある特定の NPO 法人等に預けるのではなく、このような組織を中心に京都市全体でいろいろな人がいろいろなスポーツと一緒に楽しめる場をつくっていくということにしようということだった。そういう意味ではスポーツ推進会議自体がうまくそのようなことができれば良かったと反省している。

・松永委員

振り出しに戻るのではないが、仙台のスポーツイベントのゴミ分別はどこが主体でやっているかという行政もサポートしているが、地元の新聞社の企画事業などをやっておられる方が中心になって大学などを巻き込んでやられたと聞いている。一方、京都市独自の事業として伝道事業があるが、メディア各社のトップが入っている。スポーツ＋αで広げているところの団体とこの件に関して話し合いをしたことはほとんどないので、ひょっとするといろいろな形で協力いただける団体あるいは人がいるかもしれない。仙台など先進事例にならってどういうところを巻き込んでいけるか。大学も含め、伝道事業、京都マラソンなど京都ならではのスポーツの取組でうまく展開されている事業に関わっておられる方にスポーツリエゾン京都の組織づくりについて相談・協力・意見をいただく場があると少し開けるかなと思う。ここだけではなく、他の事業との関係も気になるところである。

・山下委員長

せっかくのアイデアなので立ち消えにならないよう、次年度の推進会議に課題として引き継ぐということでこの会議を閉めさせていただきたいと思う。本日の議題はこれで終了となる。全体を通して何か質問等ありましたらどうぞ。よろしいか。それでは事務局にお返しする。

4 閉会

- ・事務局（松田室長）今回、3回にわたり「京都市市民スポーツ振興計画改定版」の策定にご協力いただいた。本日の会議の中で出た文言等への意見については委員長と事務局で調整した上で確定させていただきたいが

よろしいか。(委員賛同)

それでは、以上で第3回京都市スポーツの絆が活きるまち推進会議を終了とする。